

2021年2月10日第102回BABOK研究会議事録

PM 学会中部支部

IIBA 日本支部

1. 日時

2021年2月10日(水) 19:00~21:00

2. 場所

Zoom (Web 会議システム)

3. 出席者

(敬称略順不同)

近藤、中村、藤重、門野、大橋、浜口、山本、川島(由)、河村、鈴木(記)

以上10名

4. 議題

- (1) BABOK 学習ノート説明(藤重)
- (2) ArumakaN 作成資料説明(中村)
- (3) その他連絡・相談事項など

5. 議事

- (1) BABOK 学習ノート説明(藤重)

BABOK 学習ノートに沿って、藤重氏に BABOK の概要を講義していただき、ディスカッションを行った。

6章「戦略アナリシス」の説明時、戦略策定が BA の仕事かどうかで議論になった。BABOK ではビジネスコンセプト策定などに必要なフレームワークに言及していない。このため BABOK が BA の知識体系とすれば、BA の作業範囲外という解釈ができるが、実際には

スコープによって BA が戦略策定にかかわる事があるため、BABOK が実は不十分なのではないか、という意見があり、議論になった。

1 1 章、「専門視点」説明時、IIBA 関西支部研究会で、主にビジネスアーキテクチャ専門視点、ビジネスプロセスマネジメント専門視点を、担当分けして研究を進めているとの情報を頂いた。

各知識エリア毎に、6 つの切り口に沿って、重要なコンセプトを記述した、BACCM という概念がある。BABOK にはこの概念を視覚的に表した、BACCM の図がある。コンセプトの三角形を色分けし、放射状に配置し、関係線で結んだものだが、色使いの意味、関係線の意味などは、BABOK のどこにも記載がなく、実は誰も説明できないということが分かった。

BABOK にはプロセスという概念がないため、実際に企業活動に当てはめて学習を進める際、何処でどの知識エリアを活用するかが分かりにくい。それについて、清水氏が纏めている表があるので、それを参照しながら進めてはどうかという話になった。鈴木が昨年度作成した、BAO 活動の検討資料にも似たような図があるが、入手できれば、清水氏の表に沿って進める。

BABOK にはプロセスがないというが、Input と Output があればその間にプロセスはある。BABOK ではタスクと表現している。但し PMBOK のように有期性のプロジェクトを前提としていないので、プロセス群という切り口に意味を持たせていない。そういう意味でのプロセスはないと理解。

プロジェクトの目標と目的はプロジェクトの外で決まるが、それを決めるのが BA の仕事と理解してよいか。逆に言えば BA のアウトプットからどんな PJ をいくつ立ち上げるのかが決まると考えてよいか。という質問があり、その理解でよいとの回答。合わせて PJ 後の評価も BA の仕事。評価から次の課題を見つけることができる。

BABOK の用語は英語ベースなので、中小企業の社長などに伝わりにくい、例えば中期経営計画など、日本カルチャーの用語に翻訳すれば腹落ちするのではないか。そういったテーマの研究活動も面白い。今回モデルとして考えている仮想企業 ArumakaN がそのような日本カルチャーの中小企業と想定して、どう翻訳して伝えと BABOK が理解されるのか、という視点で議論しながら、BABOK を学んでゆくのもよい。

以上、BABOK 学習ノートの説明時に出た主な議論を記載した。

藤重氏より、BABOK 学習ノートは後半推敲が終わっていない部分があるが、それを承知の上で活用することを前提に、研究会内での共有を許可頂いた。

(2) ArumakaN 作成資料説明 (中村)

中村氏に仮想企業 ArumakaN 社のニーズ分析と、ステークホルダー分析の資料を作成頂いたので、資料を説明頂き、その後ディスカッションを行った。

これまで人材育成等でマネジメントの価値を啓蒙してきたが、現場で活用されていないとのことだった。成功の定義が必要ではないか。PMBOK、BABOK が浸透することが成功なのではなく、活用によって会社の課題を解決できることが成功と考える。そのため現状分析を実施し、将来状態を定義し、そこに向かうため、BABOK が必要と感じれば使うようになる。という意見が出された。

トップの方針を変えることができる、影響力のある人にアピールするための成果は何か。マネジメント手法を活用していなかった時に発生していたトラブルを、一部門でもマネジメントを活用することで回避できれば、成果が出る。それでアピールできるのではないか。

例えば大きな会社などでトップから下りてくる目標値が現実離れしているような場合、現場はどのような方策を考えても達成できずモチベーションが上がらない。マネジメントに対し、導入しても結果が変わらないのであれば、取り組むこと自体無駄に感じるかもしれない。製造業ではマネジメント手法として PMBOK が認知されていないので遅れていると感じるが、会社に固有のノウハウが長年にわたり蓄積されており、現場でも小集団活動などが重ねられ、最適化されているため、必要を感じないのかもしれない。

ただコロナ禍などもあり、急速に社会が変わりつつある中、経営者も変革しなければならない、所謂両利きの経営が必要なことは理解していると思われる。ただ方法論が分からないのではないか。

やはり目に見える成果を出して、経営にその方法論を示す必要がある。そうするとやはり一人では取り組めないで、まずは共感してくれる仲間を集め、ファーストペンギンチームを作って取り組んではどうか。共感をしてもらうにはまずステークホルダーを敵とみなさず、彼らが何故反対するのか理解出来れば味方にできるかもしれない。

ニーズとステークホルダーは一旦作成してもらったので、次回の研究会では、次の取り組みとして、ArumakaN 社の課題を定義し、あるべき成功の姿がどういう形になるのか、皆で意見を出し合い、掘り下げてはどうか。

(3) その他連絡・相談事項など

特になし

6. 次回予定

(1) 日程

第 103 回 BABOK 研究会 2021 年 3 月 10 日 (水) 19:00~21:00

(2) 場所

ZOOM (Web 会議システム) 予定

(3) 議題

仮想企業 ArumakaN の BA 活動をテーマとした BABOK の体系的学習

7. 成果物

(1) [BABOK 学習ノート](#) 藤重

(2) ArumakaN [ステークホルダーエンゲージメント](#)、[ステークホルダーからの要求](#) 中村

8. その他

特になし

—以上—